福祉見てある記50

ファミリーホーム（宮津美光、みどりさん宅）を訪ねて

本研究所研究員　出川　聖尚子
（児童福祉）

「ファミリーホーム」とは小規模住居型児童養育事業で、平成21年度に創設された制度です。家庭的養護を促進するため、保護者のない児童または保護者に監護させることが適当でない児童に対し、養育者の住居（ファミリーホーム）において複数の児童（５～６人）の養育を行うものとされています。今回はファミリーホームをされている宮津さんのお宅に訪問させていただきました。

宮津さん宅は、熊本市東区にある、周りを畑に囲まれている一軒家です。宮津美光さん（58）・みどりさん（56）夫妻、美光さんのお母さん、小学生２名、高校生２名、無職の子1名（いずれも男の子）の委託された子どもたち5名と離れには宮津さんご夫妻の五男が住んでいて、合計９名の大家族で暮らしています。宮津美光さんは専門里親、みどりさんは養育里親として里親登録をしています。

ファミリーホームをはじめるまで～

以前は自営業を営まれていた美光さん。非行少年への支援をするボランティア（「シティエンジェルス」）活動を行っていました。ご夫妻の男の子５人の子育てがひと段落し、人からの勧めもあり、仕事のかたわら里親を始められました。里親を始めて今年で8年目を迎えます。ファミリーホームをすることを決めて自営業を辞め、平成23年、県内ではじめてのファミリーホームとなりました。

ファミリーホームの暮らし～

９人が暮らす宮津さん宅。広いダイニングキッチン、リビング、家庭用風呂など共有スペースと子どもたちの部屋がありました。小学生たちがいる部屋、年齢が高い子たちの部屋に分けられ、子どもたちには、机といす、ベットからなる自分の空間があり、アコーディオンカーテンでひとりの空間にすることができます。

子どもたちとの日常は、朝は子どもを起こしたり、朝食を食べさせ、学校の近くまで送ったり…。学校から子どもが帰ったら、おやつを食べながら学校の話をしたり、子どもの好きなことを一緒にしたり、夕食を食べたり、宿題を見たり、寝かせたり…。「学校に行っている時間がホッとしますね」と美光さん。「ファミリーホーム（以下ホーム）は、施設と違って子どもたちにいろいろな行事やプログラムがないから施設からここに来た子にとっては暇でしょうがないみたい…。」一般家庭と同じ日常がみられました。

ファミリーホームは小さい子がいると上の子たちが世話をしたり、穏やかになったり様々な年齢の子ども同士の中で育ちあいができます。ただ、その年齢のバランスがくずれ、

宮津美光さん、みどりさん

子どもの年齢が偏るとけんかや競い合いなどが多く出てきてしまうように感じるとのことでした。

家族になっていくために～

子どもたちは、上の子に「○○にいさん」、下の子に「○○くん」、宮津さんは「お父さん」、みどりさんは「お母さん」と呼んでいます。叱る役を美光さん、寄り添う役をみどりさんと役割分担しています。「ホームに来て自分たちを「お父さん」、「お母さん」と呼ぶのに時間のかからない子のほうが、いろいろな難しさをかかえているね。」と美光さんは話していました。

「一緒に寝て。」とみどりお母さんに添い寝を頼む小学生、その背中をなでながら寝かしつけます。ホームに来た3歳や4歳の幼い子たち、恥ずかしそうにみどりお母さんのおっぱいを飲むことも。「どんな子でも、お父さん・お母さんを求めていると感じるわね。」みどりさん。

「自分がどうしてホームで暮らしているのか」、「他の子がどうしてホームで暮らしているのか」自分のことも、一緒に暮らしている子の事情もある程度子どもたちは知っています。楽しいこともつらいこともお互いに「分かち合う」ことを暮らしの中で大切にしています。「いっしょに暮らして、つながって、だんだん家族になっていくんです。」美光さん。長期の休みには宮津さん宅で暮らしていた子が帰ってくるのを楽しみにしています。

宮津家に預けられた子どもたち～

宮津家には、短期間も含めると今まで18人の子どもを預かってきました。預かった子どもたちの家庭は親の死、病気、経済的な問題

ホームの子どもがつくった宮津家ファミリーホーム新聞の一部

などの事情があります。子ども自身も発達障害や知的障害、児童自立支援施設から来る子どもたちもいます。

「どの子にも数えきれないほどのエピソードがあるのよ。」とみどりさん。「最初に預かった3歳の子は、本当にかわいくて、子育ての喜びや楽しさを感じさせてもらったわ。」、「施設に入る前の間しかホームにいなかった４歳の子。ネグレクトが原因で養護が必要に。耳が聞こえない、おむつをつけた状況だったのに、ホームを出る50日の間に、話せるようになって、パンツで動けるようになったのよ。」うれしい思い出も。一方、「委託中、問題行動を起こす子どもがいて、ショックでしばらくなにもできなかった…。」と苦い思い出も。

「最近、高校を辞めてね…。これから新しい進路を子どもと一緒に考えなくては…。」と子どもとの生活は日々いろいろ起こっていました。

訪問させていただいて～

「子どもの気持ちを大事にしたいと思っているが、今はおとな側の事情が優先されてしまう状況にある。」と言われた美光さん。「子どもたちはなるようにしかならん」と諦めとも取れる言葉に、子どもに寄り添うことを大切にしている思いが伝わってきました。